

優秀賞

「無音の伴奏」

境田博美

老ピアニスト・馳慎一。3年前に脳梗塞を

電車が揺れる音。

患い、一次は再起が危ぶまれていたが、回復し、  
復帰リサイタルを控えている。

アナウンス「間もなく西小倉です……」

初心に帰って残りの人生をピアノに捧げる  
ことを誓う馳。そのためには、何を置いても弾  
かなければいけない特別なピアノがあった。

電車がホームに入り、ドアが開く。

そのピアノは、郷里の北九州・西小倉の小さ  
なバーにある古びたアップライトピアノ。

携帯電話の着信バイブ音。

登場人物  
馳 慎一 (17)  
" (67)  
及川 梢 (31)  
" (81)  
及川尚也 (56)  
馳 由美 (48)  
マネージャー  
配送スタッフたち

両親から医学部受験を厳命されていた高校  
生の馳。受験の妨げになるからと好きなピ  
アノから引き離され、梢の経営するバーに駆け  
込んだのだった。バーの開店前の時間にピ  
アノを弾かせてもらいながら、音楽への情熱を  
再確認した馳は、家出をしてピアニストを目  
指すことを決める。梢への恋心も打ち明け、一  
緒に上京しようと誘うが、梢は断る。「夢を叶  
えたら、またこのピアノを弾きにきて」と。  
50年越しに梢との約束を果たす馳。ピ  
アノはすでに壊れ、まともに音も出せなくなっ  
ていたのだが……。

馳「はい。馳です」  
マネージャー「先生！ 今、どちらですか？」  
馳「西小倉」  
マネージャー「はい？ どこですか、そこ？」  
馳「北九州だよ。里帰りだ」  
マネージャー「えっ、どうして急にそんな！  
明日の予定、ご存じですよ？ 先生の復  
帰リサイタルの打ち合わせですよ？」  
馳「わかってる。打ち合わせの時間までに  
は帰るから、心配しないでくれ」  
マネージャー「……先生。もしも気が進まな  
いなら、やはりお断りしましょうか？」

馳「そんなことは言っていない」

マネージャー「3年ぶりのリサイタルなんですから、行うなら万全の状態です。やるべきです。焦る必要はないと思います」

馳「指の状態は万全だ。私は弾くよ。ピアノリスト。馳慎一は、脳梗塞で倒れた3年前に死んだ。そんな風に言わせたりはしない」

マネージャー「先生」

馳「そのために、今日私はここに来たんだ」  
マネージャー「どういうことですか？」

馳「私自身、二度とこの指が思い通りに動くことはないかもしれないと諦めかけていた。しかし、またピアノを弾くことができるんだ。残りの人生、初心に還ってピアノに捧げるよ。そのために、私には何を置いても弾かなければいけないピアノがあるんだ」  
マネージャー「え？ せんせ…（途切れる）」  
馳M「鬱陶しいな。電源を落としておくか」

家電店の宣伝ソングなど、駅前喧騒

馳M「随分、賑やかになったな。（笑って）」

50年ぶりなんだから変わって当たり前か。…50年、そんなになるのだな。鞆一つでこの街を飛び出した18歳のあの時から」

大きな荷物を地面に降ろす音。

年配の配送スタッフ「もつと静かに降ろせ！」  
若い配送スタッフ「すみません！」

馳M「私とそのピアノに出会ったのは学校から塾へと向かう、いつもの道の途中だった」  
年配の配送スタッフ「奥さーん。このまま奥でいいですよ？ こら、もつと水平に！」  
若い配送スタッフ「すみません！」

カランカランと店のドアが揺れる音。

馳「古びたアップライトピアノが『バー梢』

と看板の出た、小さな店に運びこまれてい

った。いつもなら、そんな場所で立ち止まらずに、まっすぐ塾に行っていたところだ。授業が始まるまでのおよそ1時間、自習室で予習するのが当時の私の日課だったのだ。しかし、その日の私には、その店の前を素通りすることができなかった」

カランカランと店のドアが揺れる音。

梢「ごめんなさい。6時からなんですよ…  
：あら？ ダメよ、子供がこんな店に来ちゃ」

馳M「カウンターの中では、柔らかな眼差しをした30歳位の女性が困ったような微笑みを浮かべて私を見ていた。私の眼は店の奥に置かれたピアノだけを見ていた」

馳少年「あ、あのつ。そのピアノ！」

梢「ああ、これ？ 友達からお古を譲って貰ったの。ピアノを弾ける人と呼んでミニコンサートでも開こうかしらと思って」

馳少年「ほ、僕、弾かせて貰えませんか!」

梢「え?」

馳少年「お願いします!」

梢「(笑って)ここ、お酒を出す店よ」

馳少年「僕、もうすぐ18になります!」

梢「でもダメ。あなた、その制服、いいと

このお坊っちゃんしか通えない学校のでし

よ? こんな店に出入りさせちゃ、私が親

御さんに訴えられちゃうわ」

馳少年「親なんか……(涙声になって)関係

ない……(鼻水を啜る)」

梢「あらあら。ちよつとお座りなさい。ジュ

ース、飲む? オレンジしかないけど」

ジュースをグラスに注ぐ音。

馳少年「(涙声で)す、すみません」

梢「あなた、ピアノ弾くの?」

馳少年「6歳の時からずっと弾いてました」

梢「あらすごい。でも、こんなポロピアノじ

ゃないわよね、きつと」

馳少年「グランドピアノです」

梢「やつぱり。だったらお家のピアノ弾きな

さいよ。こんなオンポロなんかより」

馳少年「(泣く)もうないんです。お父さんに、

昨日……捨てられて……」

梢「まあ」

馳少年「受験勉強の妨げになるからって……」

梢「あなたがピアノに夢中になり過ぎて、お

父さん、心配になっちゃったのね」

馳少年「勉強もちゃんとするって言っても信

じて貰えなくて。……僕、ピアノ弾きたい」

梢「いいわ。ここで弾いていきなさい」

馳少年「えっ、いいんですか!」

梢「ただし、お店が開く前の6時迄ね」

馳少年「それでいいです。僕も6時半には塾

だから! あの、本当にいいんですか!」

梢「どうぞ。モーツァルトさん」

馳少年「ありがとうございます!」

クラシック曲を次々と奏でる。

梢「(苦笑)知らない曲ばかりだわ」

馳少年「それじゃ、おば……(言い淀む)」

梢「ママ、でいいわよ」

馳少年「ママの好きな曲、弾きます。リクエ

ストしてください」

梢「そうねえ。……越路吹雪の愛の賛歌は?」

馳少年「歌謡曲は、わからないです」

梢「お坊っちゃんには俗っぽすぎたかしら。

こういう歌よ」

ラジカセにカセットテープを指す音。

越路吹雪の『愛の賛歌』が流れる。

馳少年「明日まで待つてください。覚えてき

ますから!」

梢「あら、明日も来るの?」

馳少年「だ、ダメですか?」

梢「(笑って)いいわよ。同じ時間ならね。で

も、お勉強もちゃんとするのよ」

馳少年「はい！ ありがとうございます！」

馳M「その日私は、初めて塾に遅刻をした。

楽器店に立ち寄り、『愛の賛歌』の楽譜を探していたからだ。店員から、元はエディット・ピアフの作品だと教えられ、やっと見つけることができた」

ピアノで奏でる『愛の賛歌』。

梢「（合わせて鼻歌）あなたへの燃える手で

く

演奏が終わる。拍手。

梢「本当に1日で弾けるものなのねえ」

馳少年「明日も来ていいですか？ 明後日も」

梢「ええ、ぜひ。私も、仕事の前にこんな素敵な音楽を聴けるなんて、心が洗われるも

の。あ、お菓子食べない？」

スナック菓子の袋を破る音。

馳少年「そういうのは食べちゃいけないって

お母さんに言われてて。体に悪いから」

梢「美味しいのに。じゃ、私だけ頂くわ」

バリバリとスナック菓子を齧る音。

馳少年「あ……（言いつらそうに）やつぱり」

梢「（笑って）食べたい？」

馳少年「（恥ずかしそうに）はい……少しだけ」

梢「たまには羽目を外さなきゃね。どうぞ」

遠慮がちにスナックを囓む音。

馳少年「……美味しいです」

梢「でしょ」

ピアノで奏でる『愛の賛歌』。

馳M「塾の自習室ではなく、開店前のバーで、

ママ一人をお客に、ピアノを弾いて過ごすのが僕の日課になった。受験勉強も疎かに  
はしていなかったつもりだ。しかし……」

玄関のドアが開く音。

馳少年「ただいま」

由美「慎一、ちょっといらっしやい！」

馳M「私のバー通いは、1月もしないうちに、

母の知るところとなってしまう」

由美「あなた、塾の前に寄り道してるでしょ」

馳少年「え、べ、別に……」

由美「とぼけてもダメよ。ご近所の人教え  
てくれたのよ。あなたがいがわしいお店  
に入っていくのを見たって！」

馳少年「いかがわしい店なんかじゃないよ！」

平手打ちの音。

由美「なんてこと！ 真面目に勉強している

とばかり思っていたのに！ お父さんになんて言ったらいいの！」

馳少年「お母さん、僕はただ……」

由美「いいこと？ 二度とあのお店に行つて

はダメ。お店の人にも、はつきり言っておいたから。うちの大切な息子に近づかないで。悪い遊びを教えないでって」

馳少年「え……」

由美「わかったわね。あなたはお父さんの病院を継いでお医者様にならなきゃいけないだから。もっと自覚を持ちなさい」

カセットテープの奏でる

越路吹雪『愛の賛歌』。

店のドアがカランカランと揺れる音。

梢「ごめんなさい。今日は臨時休業なの。

……え？ 慎くん！ どうしたのこんな夜中に」

馳少年「（泣きながら）ごめんなさい。お母さんが、酷いことを言つたつて」

梢「（苦笑）まあね。柄にもなく、ちよつとシ

ョックで、お店休んじゃった。お家、抜け出してきたの？ ダメよ、早く戻らないと」

馳少年「ママ、僕、家出します！」

梢「え？」

馳少年「お医者になんかなりたくない！ 東

京に行つて、ピアニストになる！ だから、ママ、一緒に来てください！」

梢「え？」

馳少年「僕、ママのことが好きです！ 東京に

行つて、バイトしてお金稼ぎます！ 年もごまかしてバーでピアノを弾く！ だから

……」

梢「（笑つて）いいの？ こんなおばさんで」

馳少年「おばさんだなんて思つてません！」

梢「ありがと。……でもね、私は行けないわ」

馳少年「どうして？ 僕が子供だから？」

梢「そうよ。……私ね、子供が居るのよ。息

子。まだ6歳。お店の時間は母に預けてるの。勿論、置いてなんか行けないわ。でも、子供が子供の父親になんかなれないでし

よ」

馳少年「そんなことない！ 僕、頑張るか

ら！」

馳M「ママは、静かに微笑んで、首を横に振

つた」

梢「それに私、この街が好きなのよ」

馳少年「ママ……」

梢「あなたのことは応援するわ。どこに行つても。いつか、あなたが夢を叶えたら、またこのピアノを弾きに来て頂戴。それまで

はもう、ここに来ちゃだめ」

馳少年「……ママ」

梢「いいわね？」

馳M「そう言つてママは、私の頭をそつと抱き寄せ、額にキスをしてくれた。……その

夜以来、ママには会つていない」

馳M「『バー梢』は無くなつていた。50年前に

店があつた場所には、モダンな店構えの喫

茶店ができていた。名前は『カフェ梢』」

カランカランと店のドアが揺れる音。

及川「いらつしやいませ」

馳M「カウンターの中で微笑むマスターは、

ママによく似た柔らかい眼差しを持つ、初

老の男性だった」

馳「キリマンジャロを」

及川「かしこまりました」

馳M「店の奥には、古ぼけたアップピアノが

あつた。そこだけがあの頃と同じように」

馳「この店、以前はバーではなかつたかな？」

及川「ああ、母の店ですね。私が引き継ぎま

して、喫茶店に改装させていただきました」

馳「なるほど」

及川「もう15年近く前ですよ。お客さん、随

分と足が遠のいていらつしやつたんです

ね」

馳「地元なんだが、実は50年ぶりだね」

及川「50年？ それは、それは」

馳「いつか戻つてくる。そう約束した人がい

たんだが。だからこそ戻つてこれなかった」

及川「ほう、またどうして」

馳「私は子供で相手は大人だったから。約束

を後生大事に忘れずにいるのは、どうせ私

のほうだけだろうと思うと恥ずかしくて

ね」

及川「お待たせいたしました」

コーヒーカップを置く音。

馳「ああ、いい香りだ。……あのピアノは、

前の店の時と変わらないね」

及川「ああ、壊れてますけどね、とつくに。

母から、絶対に捨てるなときつく言われて

いて。そのくせ、おかしいんですよ。誰に

も弾かせちゃダメだとも言ってます、昔か

ら。私、このピアノを誰かが弾いていると

ころ、見たことないですよ」

馳「……そうなんですか」

及川「母が元気な頃は、定期的に調律師さん

を呼んでいたんですけどね。私はついつい

無精をしてしまつて放つたらかしで。この

前、試しにちよつと音を出してみたら、も

う酷いもんでした」

馳「……私に弾かせていただけませんか？」

及川「え？ まともに音、出ないですよ」

馳「私はそのために、帰ってきたんです」

及川「……（静かに）わかりました。どうぞ」

馳「ありがとうございます」

ピアノの鍵盤が、軋むような音を、微かに途切れ途切れに立てる。

馳「（苦笑）確かに、酷いな」

及川「でしょう？ あ、私ちよつと2階へ行ってきていいですかね。母が寝たきりです。そろそろおむつの様子を見てこないと」

馳「そうですか。私はしばらく弾かせていただきます」

及川「ええ、どうぞ。ちよつと失礼します」

トントンと階段を上がる音。

鍵盤の軋む途切れ途切れの音が続く。

トントンと階段を駆け降りてくる音。

及川「（興奮して）いやあ、お客さん。驚きま

したよ！ 今ね、母が鼻歌を歌っているん

です！ 何年も声を出したこともなかったのに」

馳「歌？」

及川「そうなんです！ 昔の歌だったなあ。なんだっけ、聞いたことはあるんだけど」

馳「（歌う）あなたくの燃える手で〜」

及川「そう、それです！お客さん、なんでわかるんですか？！」

馳「（穏やかに）どうしてでしょうね……」

ピアノが奏でる『愛の賛歌』を伴奏にして、伸びやかな梢の歌声が響く。

了